

熊本近代史研究会

『第六師団と軍都熊本』

熊本近代史研究会 二〇一・三刊

A5 五〇八頁 四五〇〇円

本書は近年進展をみせている「軍隊と地域」研究、すなわち近代日本軍隊およびその対外戦争遂行の基盤としての地域社会史研究の系譜に連なる論文集である。熊本近代史研究会創立五〇周年として刊行されたもので、主に地元在住の研究者たちが「軍都」熊本とその「郷土部隊」たる第六師団に関する諸問題を考察した論文一二本・資料紹介が収められている。熊本が明治初年に陸軍がはじめて鎮台をおいた六都市のひとつであり、現在でも陸上自衛隊の各部隊を擁していることを思えば、同地の分析対象としての重要性は言を俟たない。熊本鎮台は第六師団となり、一九四五年の敗戦をソロモン諸島ブーゲンビル島で迎える。その他、熊本で編成された多数の部隊がアジア太平洋の各戦線に派遣された。本書は大きく分けると「第六師団の歴史そのものに焦点を当てた研究と、地域社会との関わりを重視した研究」（小松裕「刊行にあたって」）の二部構成となる。前者は第六師団の一九二八年濟南事件出動、日中戦争時の南京事件、その後の警備行動時における非人道的行為への関与、太平洋戦争時のブーゲンビル島における戦闘である。これに関連して南京事件時の捕虜虐殺を示す第六師団所属兵士の従軍手帳・手紙とその解題も収録している。本書が一部の「軍隊と地域」研究とは異なり、地元の軍隊が外国の戦場で

何をしたのかという問題に正面から向かい合っているのは好感が持てる。

後者は昭和期の戦意高揚策としての「菊池南朝史観」「菊池精神」の高唱、軍用地接收をはじめとする演習場と地域民衆の関係、昭和六年陸軍大演習、日中戦争初期における熊本出身従軍看護婦の看護活動、愛国婦人会熊本県支部と戦時下の女性統合、第六師団と軍事郵便をそれぞれ扱っている。内容を詳しく論評する余裕はないが、一点のみ指摘するならば、一九四二年に愛国・国防・連合各婦人会を統合して設立された大日本婦人会の「より強固な政治性」（浦田大奨「愛国婦人会熊本県支部にみる総力戦下の女性統合」四三〇頁）とは何を指しているのが若干気になった。同会設立によって女性たちは「家庭に帰れ」と言われたというのが通説的理解（藤井忠俊『国防婦人会』岩波新書）であるように思う。

もとより「軍隊と地域」という問題に関して本書に残された課題は多い。本書の総論的性格を持つ荒川章二「第六師団の歴史と地域社会」は地域間比較、戦後の問題を挙げる。たとえば熊本に「熊本兵団」という言葉はあっても静岡に「静岡兵団」という言葉はなく、「郷土部隊」をめぐる何らかの意識の相違がここに現れているかもしれない。また、戦後の自衛隊基地、駐屯地およびこれに対する民衆意識も、近年の戦後史研究への新規参入者の増加を思えば今後の進展が期待される。このように本書からは問題関心を共有する者として多くの刺激、示唆を受けたことを付記してつたない紹介に代えたい。

(一ノ瀬俊也)